

「自分と社会、社会と自分」

森林 謙（もりばやし けん）

1. 動機
2. W さんとの対話
- 3-1. 対話の始まり、出産について
- 3-2. 親になってはじめて感じる事、子どもを通じた自分の成長
- 3-3. 仕事と育児、夢、自己実現との葛藤
- 3-4. 理想を語るに足る人になること
- 3-5. 社会に対するまなざしの変化、社会との関係性の変化
4. 結論
5. 終わりに

1. 動機

長女、珠果（MIKA）と自身の変化

何をテーマにしようかと考え、まず浮かんだのは旅であった。インドをはじめとした一人旅の経験は、今の自分に大きな影響を与えている。旅を通しての出来事や人々との出会いによって、既成概念や価値観が崩れ、それらの再構築が繰り返される。再構築されなければ自分を見失うことになりかねないが、それが一人旅の面白味でもあり危うい魅力でもある。旅を続けそのまま命が絶えることもひとつの生き方かもしれないと今でも思うことがある。

しかし、すでに10年以上も旅らしい旅などしていない。今の自分が過去の旅についてどのように解釈をするかに興味がないわけではないが、今本当に書きたいことかといえばそうでもないように思う。もともと書くことや感じたことを言語化するのは非常に苦手である。今、どうしても書いておきたくなるようなテーマでなければ書き続けることもできないし、書くことの意味も薄れてしまうのではないか。

そこで、思い至ったのが娘の珠果の存在についてである。これまで人が死んだ状態を見ることはあっても、人がこの世に誕生する瞬間を見るのは初めてのことであった。珠果は小さくか弱い存在であるものの、生きることへのひたむきさが伝わってくる。視界に入る周囲の事柄、自らの体の動きについても、毎日が発見と分析、試行錯誤と確認の連続であ

り、それらが迷うことなく生きることに直結している。

人がこの世に誕生し日々成長していく過程を目の当たりにすることは、自分にとって貴重な経験であると同時に幸せなことであると感じる。以前なら、電車の中でも街角でも乳児の泣き声はただの騒音であり、他人事ではなかった。今の自分はその泣き声の主の気持ちや状態を探ろうとしていたり、泣き止まない子への母親の困惑にも共感したりする。また、珠果と一緒にいることで、公園、駅、電車の中、レストランなど、知らない人と自然と話をする機会が増えた。社会的な立場にも変化が生じている。

珠果の存在により未知の世界に足を踏み入れることになり、生活のスタイルやリズムだけでなく、物事の受け止め方や考え方も大きく変わっている。一人旅とはちがうものの、どこか旅に通じるものもあるような気もしてくる。珠果との関わりを通しての自身の変化、得たものについて考えてみたいと思う。

※以下はグループでの話し合いから求められたものを文章化したもの。W さんとの対話にも使用。

「妊娠したかもしれないよ」と意味深長な笑みを浮かべた妻が言った。そのときから、毎日の生活が少しずつ変化していった。定期検査の付き添い、出産準備教室への参加、そして出産の立会い、育児。周囲からは何かと大変だと聞かされていたが、実際には大変さ以上にすべてが新鮮で楽しいと思える。

妻は妊娠していたとき、つわりがひどくなり飲み物も食べ物もまったく口にできなくなる時期もあった。見ていて大変そうだと思っても、代わりを引き受けることはできない。定期検査では、妙に恥ずかしく待合室に座っているだけでも落ち着かなかったが、クリニックに通い続けるうちに慣れてきた。モニターの映像を通して胎内で珠果が手を上下に動かしている様子を見ていたとき、珠果が突然動きを止めた。そして、こちらに顔を向けたままじっと動かなくなった。外の世界から覗かれていることに気づいたのだと思った。

妻は出産の時期が迫ると、せり出したおなかのせいで思うように体が動かなくなり足元も見えにくくなる。椅子から立ち上がることもすら難しくなり、歩くときにもすり足で慎重にゆっくりとした動作になる。かなり大変そうだが、ただ声をかけたり手を貸すぐらいのことしかできない。体調の悪い力士のような動きに見えるが、妻の表情はどこか満足気である。体の中に別の生命が存在するというほどのような感覚なのか想像もつかない。

予定日の1週間前の朝、破水していることに気づきすぐ病院へ向かった。妻はまだ予定日ではないからのんびり構えていたが、入院することになる。一旦、自宅に戻り必要なものを再度揃え、翌朝病院へ向かうつもりであったが、その日の夜から陣痛が始まった。妻は、顔に酸素マスクを当てられ、かなり呼吸が荒く意識が朦朧としているように見える。何度も力んでいるが、珠果はなかなか出てこない。ここまで追いつめられ辛そうな表情の妻を見るのは初めてであった。珠果の頭が見えてからの状態からなかなか先へ進まず、そのまま30分ほど経過したため一時は危険な状態だと医師も心配そうであったが、午前3時、珠果が産まれた。赤ちゃん特有の泣き声から生きていることが伝わってきた。妻は出産を終えたことに気づいていないほどの状態で、自分には「がんばったね」と声をかけることぐらいしかできない。

しばらくすると、珠果は顔や体をきれいに拭かれ布にくるまれた状態で看護師によって運ばれてきた。

すでに泣き止み左目だけがうっすらと開いている。小さな顔にアンバランスなほど目が大きい。そして、小さな手。妻はベッドに横になったまま、少しだけ頭を起こしぼうつとした表情で珠果を抱きかかえた。その瞬間、一気に喜びに満ちた表情になり、何度も「かわいい」と声を絞り出すように言い続けている。妻と珠果、ふたりが無事であることに安心した。

2. W さんとの対話

日時 2008 年 11 月某日 14 時から 15 時半

場所 地域の子育て支援施設内

W さんとは 20 代後半に、ある日本語教師研修を通じて知り合った。当時から W さんに対しては、明るくパワフルで常に物事に前向きで取り組む人だという印象を持っていた。対話相手として W さんを選んだ理由は、これまでのやりとりの中から互いが生きてきた道のりは対照的で、世界観は異なっているも目指す方向性のようなもどこか共通点を感じていたこと、W さんとのやりとりからこの十数年を振り返ってみたいと考えたからである。

W さんとの対話は、子育て支援施設内において W さんのお子さんを遊ばせながら行った。

3-1. 対話の始まり、出産について

W：酸素マスク当てられたの？

も：うちのカミさん、体力ないからだと思っただけだね。

W：ふーん。じゃ、けっこう長いお産だったの？

も：あもう、出せないの。自力で。

W：ああ。うち、満月だったの。

も：出ました？すぐに。

W：あもう、それが満月の日で。

も：満月？

W：中秋の名月。9月の。

も：ああ、はいはい。

W：ほんとに月の光に引っ張られるようにというのはこのことだっていう感じで、こうジェットコースターがビュンと降りるみたいに出てきた。

も：へえ。うち、全然そうじゃなかった。

W：そうか。つらいでしょうねえ

も：気持ちいいでしょうね、ズンって出たら。

W：まあ、それでもかなり辛いと思ってたけど。

(中略)

W：(珠果の写真を見ながら) ああ、ああ、かわいい。泣いちゃったでしょ？これ (笑)

も：泣かないけど、なんか大変だなあって。ほんと大変だなって思って。言葉が出ないんだよね。大変すぎちゃって。

W：うちのダンナも。わたしはそれでもけっこうジェットコースターで終わったんだけど、見てたほうはほんと辛かったらしくて、もう、なんか、本人よりも辛く見えるんだと思う。

も：いや、だけど、大変なのは本人だけだね。だって . . .

W：こっちはさ、何も見えてないもん、アーッとかももう、いろいろ言いたいこと言ってるけど、向こうは何もできずオロオロ、早くさせてっとか言って、なんか、もう、破水とかバーッとするし (笑)

(中略)

も：なんか、その、妊娠、出産とかの、たぶん恐怖みたいなのは、おれがわからない何かがいっぱいあって

W：ああ、ああ、そうだよな。

も：その、産まれて抱っこしたときに、突然表情がこう喜びに変わった凄さが . . .

W：ああ、ゾクゾクしちゃった。

も：本人にしかわからない、たぶん何か、いろんな葛藤を、が、すべて払拭されて、ああ、無事に産まれたってのが自分になんかあったんじゃないかなって。

W：ああ、うんうん。すごいわかる気がする。

も：不安は不安でしょ。本人だし。で、出産って、世界中で当たり前に行われてるけど、実際、すごいからね (笑)

W：すごいよねえ (笑)

も：漢字で、妊娠、出産、って言葉じゃ足りない、奥の世界があるじゃない？

W：ははは (笑)

も：だから、なんかね、言葉で表現しちゃうことの何か . . .

W：ああ、わかるわかる。しきれないよね。

も：しきれないんだよね。ただ、行為としては、出産は出産なんだろうけど。

W：たぶん、あと、まあ、二度目の出産はないと思うけど、たぶん、一回目の出産は特に格別だと思う。

妊娠中の心身の負担、そして出産の痛みや苦しみは尋常ではないはずである。しかし、Wさんは(自分の妻も)そのことを語るときには実にあっけらかんとしている。辛さをすっ

かり過去のものとしてしまうほどの喜びがあるのかもしれない。

出産に立ち会うことは、妊娠が判明したときからなんとなくそうするものだと決めていた。妊娠も出産も引き受けることはできないわけで、せめて見届けることぐらいはしておきたいと思っていた。出産に立ち会うことに関しては様々な意見があるようであるが、結果として、立ち会うことができてよかったと思う。ただ見ていただけであっても、命の重さを理屈抜きで実感することができたからである。

3-2. 親になってはじめて感じること、子どもを通した自分の成長

W:すごい、共感ていうか、自分の価値が変容するっていうのはほんとそうだな、っていうのがあって。

も:ああ。でも、価値って変わりました?

W:でもねえ、価値ってさ(笑)あ、大きい声で言っちゃった。自分の生きてる意義みたいなのがすごい変わるっていうか。うん。

も:あ、確かに。

W:なんか、なんかうまく言えないんだけど、生命体として安定している。

も:自分が?

W:そう。生物として。

も:なんだろう。だれでも最初は子どもとして生まれてくるんだけど

W:そうそうそう。

も:親としての経験があることで、バランスがどっかとれた気がするみたいな?

W:そうなのそうなの。それでね、ただ、絶対子ども産まなきゃこうだとか、そういうことじゃ絶対なくて。

も:うん。

W:子どもがいるかどうかは関係なく、それぞれがいろんな役割があつたりやんなきゃいけない使命とか与えられて・・・

も:社会の中でのね。

W:そうそうそう、天からの使命みたいなものもあるし、それで、たぶん、なんか、例えば今も、わたしも、周りにすごい支えられてるっていうか、まだ子どものいない自分の妹とか、友達とかでもさ、子どもいないんだけど、すごい心をケアしてくれるとか。あと、実際産んだときの看護師さん、婦長さんは、自分が子どもを産んだことがない人なんだけど、会社員時代の先輩で今子どもいないんだけど、保育園に勤めてて、社会の中でそうやって、人として次の人を育てていくとか、

も:うん。関わることはいくらでもできるってこと?

W:それは、人間の本性っていうか、人によって、温度差とかはあるけど。でも、自分は、

直接に、濃く、交わることができるっていうか。それでも、わたしはダイレクトに経験ができなきゃわかんないことがたくさんあって。よく「子育ては親育ち」とか言うけど、自分はこれがないと人間として成長ができないと（笑）

も：ああ……子どもがいることで自分が成長する。前は、一応、なんか、仕事やってるっていう意味での社会的責任果たしてるような気はしてたんですけどね。だけど、何がちがうのかなあ。

W：うーん。

も：何だろう、命預かってる部分？

W：そうそうそう、そうなんだよね。なんか、産んでから、この世の生物がすべてお友達に思えて（笑）

も：ああ

W：ウミガメの産卵とか見ても、ああ、同じ！あの時と！とかね（笑）

も：そっか。ウミガメの産卵でも共感するんだ（笑）

W：するする。あと、チンパンジーとかが抱いておっぱいあげてたりすると、おんなじよねとか（笑）

も：ああ、自分の体通してるからかなあ？

W：余計そうかもしれないけど。もう仲間みたいな（笑）わかる、わかるみたいな（笑）

も：ああ。ふーん。

自分の場合、ウミガメの産卵、チンパンジーの授乳を見て何かを感じることはあっても、さすがに共感するという感覚をもつことはない。自分の体から生命体を産み出すという経験が共感を引き起こすのか。Wさんは、自己の変容について「生命体として安定している」と表現し、社会の一員としてのある役割、自身の成長について述べた。

自分たちが生きている社会はこの社会に誕生し現存しているそれぞれの命によって構成され、自分自身が社会を構成する存在でもある。自分が生まれた時点ですでに社会は存在し、その社会によって自分がつくられていく。そして、社会をつくっていく存在となっていく。このサイクルの中に自分が存在することを実感するようになったきっかけは、やはり珠果の存在の影響かもしれない。妻にとっての夫、社会における〇〇、肩書きというか役割というか、そのようなものが自分に付け加えられたり変化したりすることにより、見えなかったものが見えてくるようになる。珠果を通して見えてきたものは、社会を支える命の重さだと思う。

3-3. 仕事と育児、夢・自己実現との葛藤

も：例えば、仕事も自分にとっての自己実現だし、仕事あつての自分だし、子どもあつて

の自分だし、その辺のバランス、折り合いとかよくつけてますよね？だって、仕事ハードでしょ？

W：やっぱ葛藤はすごくあって、ハードって言っても、ほかの母親がやってるようなことは全然してないわけだし。

(仕事のしわ寄せが子どものほうへ行く話が続く)

ちやんとご飯つくれないとか、こっちが何かしなきゃって焦ってるわけで。

も：甘えられないというか、ママの余裕のなさを感じ取る。

W：そうそうそうそう。(子どもは) パソコンに向かっている姿がすごく嫌いなの。

も：ああ(笑) そうそう(笑)

W：うちの母親なんかも、それは子どもの前でやっちゃダメだと。

も：うん。

W：一種のメッセージで、あなたよりこっち(仕事)が大切なんだよって言ってるようなものだからって。

(中略)

W：(子どもを預けて仕事をするという選択は)後悔しそうだった。で、仕事第一でやっていく人とかもいるんだけどさ。0歳児からフルで預けて。でも、そのときにはねえ、その選択はできなかったんだよね。

も：やっぱ(子どもを)みていたい？

W：うん。自分は、そのときにはそうだよ。一緒にいる時間はものすごく大事じゃないかと思ってた。

Wさんは、「ほかの母親がやっているようなこと」をしていないことを認識し、仕事と育児の葛藤について語っていた。妻にとっての夫、珠果にとっての父親である自分が仕事を辞め、今年の4月からは大学院の学生となった。大学院に入学したことは今の自分にとって大きな意味があることにちがいないが、妻や珠果にとってはどうか。将来的な不安だけでなく、経済的、時間的負担をかけながら、結果として自分のやりたいことを優先している。自分自身を成立させなければ、妻、珠果、周囲の人に対して喜びを与えられるような存在にはなれないと思う。所詮は自分のエゴイズムでしかない、のか。常に、夫や父親でいることもできなければ、学生でいることもできない。夫、父親、学生、そのひとつを無理に貫こうとすれば足元が崩れ去ってしまう気がする。夫して父親として学生として、それぞれが不完全で中途半端であっても、迷い考えながらその都度できることをしていくほかないのであろう。

3-4. 理想を語ること、それを語るに足る人になること

W：なんか、すごい青い話だけど、

も：青い？

W：青いというか

も：青い考えの青い？

W：うんうん。あのう、要は（自分が）会社員やってたときに、もうちょっとダイレクトに、人が幸せになるとかそういう実感のある仕事がしたいとか、思っていることすら、もう甘い考えだけど、それで、一步を踏み出しつつ、この道（日本語教育）に転向してもそんな甘い話でもないことを知りつつ、やっぱりどこかでそれを願いながら、（今の）仕事をしているときに、例えば、ラブ&ピースとか言いながら、結局この子一人が幸せに生きず、家族が幸せに生きずして、そんなのあり得ないじゃん、みたいな。

も：うーん。そこなんだよね、マジで。ああ。うん。ほんとそう思う。社会的体裁以前に、足元のところをきちんとやってないと。

W：この子が日々幸せな気持ちでいて、人にも優しくなれるような、そういう何かの素をつくるような仕事をやっぱりしているわけで、それがちゃんとできずして、なんかね、学生を前にして多文化共生なんてね（笑）おかしいよね、みたいな（笑）

も：ははは（笑）わかるな（笑）おれもね、それ、実感する。人間とか命とか社会とかの基本的なことを実感しはじめると、足元をちゃんとしてないことのバランスの悪さってのは、うん。

今回の W さんとの対話で、一番印象に残ったやりとりである。W さんがこのようなことについて熱く語るのには少々意外であった。物事を斜めに見がちな自分とはちがひ、W さんは比較的真っ直ぐに受けとめる人であったという印象があったからである。理想的なことを語る際、それが胡散臭さを伴ってしまうかどうかはそれを語る「人」次第であると思う。自分が日ごろから周囲とどのような関係をむすぶことができているか、油断せず問い続けるべき問題であると思う。

3-5. 社会とのつながり、社会に対するまなざしの変化、社会との関係性の変化

W：当たり前のことなんだけど、人のつながりの大きさ。わたし、すごくそれは変わって。同じマンションの中で子どもが生まれてから話す人の量が

も：おれも、そう。以前だったら、知らない人とそんなに話さない。

W：生まれる前は挨拶だけだったのが、話題ができる。

も：ああ。

W：隣近所の人たちと、こんにちは、さようならとかだけじゃないとか。あとは、お互い頼り合うことが増える。ママ友さんとかもそうだし。前は、社交辞令だったけど、今は

本気で頼り合う。

(中略)

W: 例えば、今、フィリピンのママと仲良くしてて、あたしも助けられることがあればみたいなことももちろんあるんだけど、こっちも落ち込んでいたり、風邪引いていたりすると、ご飯持ってきてくれたりとかさ、それはもうほんとに助け合いなんだよね。おかず持ってきてくれるとか、ただなんかベラベラしゃべってるだけでこっちも救われるとか。

も: うん。

W: だから、うん、そういうふうなことって、相手にとってもただ子どもを遊ばせるってその理由があることで関係性がつくれる。

も: ああ。それはやっぱ。そう考えると、社会化、自分が社会化してるんだよね。

W: そうそうそう。ほんとそうだよ。独身のとき、自分だけの都合で働いているときっていうのは、ほんとの意味での仕事はしていなかったんだよね。なんていうのかな、

も: 社会と離れたところでも

W: 動けちゃうような。あと、人間の根幹的な生命を支えることとのダイレクトさのつながりの中に自分がいない。

も: うん、いないね。

W: 例えば、作物つくってるわけでもないし、でも、子どもの存在を通して社会に関わることで、もっとなんか生々しいものが通っている社会参加ができるっていうか。

も: うん。

W: でも、たぶん、それはさ、子どもがいなくなったら、そうできる人はいると思うの。わたしは、子どもがいなくなったらそれができなかったと思う。

も: うん。おれも子どもがいなくなったら、全然できないと思う。

W: だから、それはいなきやできない、だれもがそうってわけではないし、いろんな関わり方がもちろんあるんだけど

も: 自分の場合は、だよ。

W: そうそうそう。だから、えっと、電車の中の見知らぬ人とかの会話でもそうだし、近所の顔見知り程度の人が、例えば、おばあちゃんとかケア、気持ちの上で、ただ、大きくなったねとか、かわいいね、って言われるだけでも救われるときってあるんだよね。

W さんは、子どもがいることでの関係性、そこでの何気ない言葉から救われることがあること、人とのつながりの変化を語った。

珠果と一緒にいて気づかされる日常の変化のひとつに、他者とのコミュニケーションの量と質の変化がある。つい先日も、食事中に隣のテーブルにいた年配の方と長々と話をすることになった。相手が見知らぬ人であろうが、とりとめのない話であろうが、ただ話をすることで心があたたかくなったりやわらかくなったりしていると感じる。小難しい理屈

を抜きに、社会と自分がつながっていることを自然と実感する。単なる他者でしかなかった他者が自分と社会をともにする命を伴った存在であることに気づかされる。

4. 結論

テーマについては、旅にするか迷いながらも珠果と自身の変化について書くことにしたが、書きながらその理由がわかってきた。最近、旅をしていないというだけではないようである。旅をしていたときの自分と今の自分、どちらにより納得しているかといえば、それは今の自分であるからではないか。

旅をしていたときには、都市でも町でも村でも、自分がその社会と関わりたければ関わり、切り離したくなれば次の社会への移動を繰り返していた。自分が社会に対してどのような反応をし、何を感じるのか、そこに強い興味と関心があったように思う。社会との関わり方、自分の居場所を探していたのかもしれない。しかし、自由で刺激的な日々は徐々に空虚感を伴い始める。そして、旅を終えて新しいことを始めようと決めた。あれから約20年が経ち、当時の空虚感が何であったのかがわかってきたような気がしている。おそらく社会の中の自分に物足りなさを感じ始めていたのだと思う。自分と社会だけでなく社会と自分という視点を持つことだったのである。これからの自分がどうなるのか。角が取れて円くなるのはおもしろくない。歪で鋭角な四角形でありつつも、その四辺を半円が覆うように円になりたいと思う。

5. 終わりに

自分でテーマを選び、そのテーマにもとづいて対話を行い、レポートとしてまとめる。最後にそれぞれが書き上げたレポートを持ち寄り、コメントし合う。このように文字化すると、一見何の変哲もない活動のようにも見える。しかし、その過程で発せられることば、投げかけられることばは単なることばではなく、色、におい、形を伴ったことばであったように思う。

初日の顔合わせに始まり、グループごとのやりとり、最終段階での相互自己評価までの一連の流れを振り返ると、みんなで山を歩いていたのだなと思う。山の麓に集まり、簡単な約束事を確認した後、それぞれが思い思いの方向に進み始める。所々に設けられた広場では、それぞれの道のりで拾ったり見つけたりしたものを見せ合い語り合う。そして、またそれぞれの道（未知）へ向けて出発する。

楽ではなかったが、楽ではないからこそそのおもしろさがあった。ことば、そこから見える人というものが実感できて良かったと思う。